

ふるさと風

第77号 (2012年10月)

風に吹かれて (55)

白井啓治

『なんでも前倒し 季節の雨が泣いている』

地球温暖化の所為か、最近では季節の全てが前倒しに早まってしまい、旧暦に示された暮らしの知恵は、野菜の旬が見えなくなったように意味を失いつつある。「今の季節は、蟄虫戸を壊す(すこもりのむしとをさす)あるいは水始めて漕る(みずはじめてかれる)の頃ですね」と言っても、俳句か何かをやっている人以外は「何ですかそれ?」と言われてしまうだろう。

日本は季節の姿がはっきりと見え、その季節の姿に合わせた暮らしが合ったのだが、現代の太陽暦一辺倒になって、季節に合わせた暮らしの知恵としての言葉もすっかり忘れられてしまっている。太陽暦と太陰暦を組み合わせた旧暦には、日本の風土に適した生活の知恵が込められてあった。

私自身、旧暦の事はそれほど詳しい訳ではないが、旧暦の中には日常生活に必要な知恵が満載されているような気がする。特に農作業に於いては季節の言葉は重要な指針となっていた。「水始めて漕る」とは稲刈りの季節の来たことを指す言葉で、収穫間近になった水田は水を抜いて稲刈り

に備えるのである。ところが現代では気候が温暖化してきたことに加え、稲の品種改良で田植え時期も早まり、収穫も早まってしまったのである。

田の水を抜き稲刈りが始まる事と言えば十月の頭頃であったが、今では十月になったら稲刈りはほぼ終わってしまっている。北海道では稲作は無理と言われていたが、今では北海道は米の一大産地である。

北海道がコメの一大産地になった事は大層良いことではあるが、それによって暮らしの知恵の言葉が無くなってしまふことには大いなる溜息が出てくる。気象条件が変わり季節感が早まったとしても「早いものでもう水始めて漕れる頃となりました(早いものでもう稲刈りの始まる季節になりました)」と言う言葉は残したいものである。この言葉を残すことで、稲刈りが始まる頃には田んぼの水を引いて地面を地上の空気にあて堅くするのだ、ということを知るのである。そして、稲刈りが機械化した今日ほど、稲刈り前の水抜きは重大な事であるのだから。

このような言葉が残されることによって、稲は実ったら早急に刈り取らないと、実った米から芽が出てしまう、などと言うことを学ぶことが出来るのである。田の水を抜くと言うのは、単に稲刈りの足場を固めるだけでなく、いつまでも水田の

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

ままにしておくとも芽が出てしまうことを知る大事な教材でもあるのである。
旧暦に残された言葉には、季節と暮らしの知恵が満載されていると言える。旧暦に戻すべきだと言っているのではない。長い歴史の中に積み上げてきた暮らしの知恵としての言葉を、今の気候に合わせて暦に変換しながら使っていくことの意義を考え直すべきだろうと思うのである。

風呂

フロ||岡・坂

語源・転音 風呂という漢字に惑わされやすいが、アイヌ語に、【huru 岡・坂】、その u-o、huro フロ。

所在 水戸市常磐に風呂ノ下・塙下・山下・坂の上、この4小字の本体は同一の岡であろう。常陸太田市中染、大子町町付に風呂。土浦市上高津・中高津、行方市内宿、つくば市高須賀、結城市山川新宿、城里町上入野に風呂下。大洗町成田町にフロ下。大子町芦倉野、常陸太田市下宮河内に風呂前。桜川市大泉に風呂入。常陸大宮市若林に風呂尻。日立市友部に風呂田。ちなみに、入浴用の風呂は、【hor 水】(o、i、ya、i、ya、あ、溜まる)の o-u、huro フロと見たい。原則として水風呂であるのが、季節によつては、太陽熱や焼け石投入で温水化したか。

坂

サンカ↓サンガ↓サカ

語源・転音 【san 山から浜へ出る】(sa 前 ne になる)【ka 表面】。sanka→sanga(東北発音)、sanka は sanga (鼻濁音)、その習慣に準じて茨城南部でもサカを sanga)→saka 坂。あるいは、【san 坂 出崎、棚、棚のような平地】【ka 表面】もありうるか。【san 山から浜へ出る】【ke 自動詞について他動詞を作る】から、sage サゲ。

所在 かすみがうら市の大字に坂(サガと濁る)。そのほか各地に坂口・坂入等。赤坂は高萩市下君田、常陸太田市龜作町・西河内上町、常陸大宮市諸沢、

那珂市大内、牛久市島田、行方市矢幡などの小字にある。崖坂か赤土の坂のことであろう。

谷原

ヤワラ||低湿地

語源・転音 茨城では例えば霞ヶ浦沿岸の葦の繁るような湿地帯をヤワラとかヤーラと呼ぶ。誰もが柔らかとか柔らかという言葉に結びつけてヤーラも理解する。では、柔らかの語源は何か。なぜ柔らかい物をヤワラカイというのか。先祖たちはだれもが自然を相手に生活していた。そうしたなかでは自然を即物的に表現する言葉のみが生きていた。日本語で語源がわからないヤワラはアイヌ語で、【ya 陸、陸岸、陸の方】【ra 汐・水腫れなどが引く】【ra 低く所】と解説でき、その h-aw (例ウ ルハシールウシ、ヒダブキーヒワダブキでヤハラ↓ヤワラ・ヤーラあるいはヤラとなったものである)。当初は縄文海退後の低湿地につけた呼称であったものが、やがて、そのままその地名となつて定着したものが谷原と当て字されるヤハラ。他県には珍しいのではなからうか。ヤハラからヤハラカ(柔らか)↓ヤワラカとなった。

所在 小字谷原は取手市の旧藤代地区に14。つくば市旧谷田部地区に20。隣の谷和原(ヤワラ)村(現・つくばみらい市)は谷原村ほか3ヶ村が合併して成立した。これらの谷原地名はいずれも小貝川の氾濫原にあった。そのほか、茨城町25を始め、石岡市22、土浦市21等。筑西市・鹿嶋市に大字谷原、常陸大宮市旧山方地区に大字家和楽(ヤワラ)、大字諸沢の小字にも家和楽(ヤワラ)がある。計約370。

駄弁 五十里沼・押砂…鬼怒川は上流の栃木県五十

里(イカリ)湖で男鹿川が合流するが、その男鹿川は1683年の日光大地震の山崩れでせき止められて五十里沼をつくっていた。それが1723年8月9、10日の怒り狂った暴風雨で決壊し、人畜・田畑・家屋に甚大な被害をあたえた。被害は現つくばみらい市にも及び、翌11日には長押堤防等が決壊し、収穫皆無で年貢も全免除となっている。そのイカリとは何か。アイヌ語で見ると、【ika またぐ、超える、溢れる】【i 高くアル(ナル)】溢れ盛り上がるのがイカリ。その Ika は日本語でもイカ(古語・津軽・秋田・静岡・鳥取 あふれる、沖繩 草木が生い茂る)、Ikari もそのままイカリ(古語 水面が盛り上がる、溢れ出る、青森・鳥取 増水・洪水)。1683年以降の五十里沼は、まさにイカリ沼であった。現在もその地名は、日光市五十里であるが、細かく見れば、【ikari 溢れ盛り上がる】【i ところ・もの・人】であったらう。イカマル(静岡田方 あふれる)、イツカル(福島・関東・長野 またぐ)、イツケル(同上 またがせる、乗せる)、イツカレ(関東 乗れ)、斑鳩(イカルガ 奈良)は 【ika 溢れる】【ru 道、跡】【ka 上、岸、ほとり】洪水路のほとりということか。五十嵐もイカラシと読む。イカレポンチの意味はうすうす分かるが、イカに五十をあてるに至ったいきさつは分からない。さて、旧谷和原村の大字押砂がそれを示しているように、洪水は上流の砂を一気に押し出す。ヤワラを名乗る谷和原村やそれに続く旧伊奈町の低地にはその砂が流れ込む。人々の絶え間のない努力によつて、後世そこは谷原三万石といわれる美田に生まれ変わったが、砂地のゆえか、その味の方も北条米・小田米に劣らず美味しい。が、あまり知られていない。

坪 ツボ＝小地域

語源 和名抄に「壺 和名 都保(ツボ)」とある古い言葉で、周りを囲まれ入口のツボまつたつものがツボ。語源にはアイヌ語の【chupu(つぼめる)】があった。その母音間の転音で、チボ・チヨボ・チビ・チュブラメ、ch-nで、「豆比(ツビ)」（和名抄巻貝）ほかツボ・ツビ・ツブ・ツブル・ツプロ・ツボミ・ツボム等々、b-nで、ツム・ツメル・ツマシ、t-sで、スボム・スブ・スバル等々。多くの派生語を作ったが、地形的には、「土手、土塀で囲まれた小域、ある範囲の狭い土地」の意味で、坪という漢字が当てられ地名にも使われた。

所在 つくばみらい市成瀬に中坪・東坪・西坪、城中に、台坪・東坪、南太田に中表、つくば市若栗に東坪・西坪・上坪・下坪、上石崎に中坪、稲敷市清水に中坪・東坪・西坪、河内村の大字、手栗・羽子騎・古河林はどれも上坪・中坪・下坪の小字だけで成り立っている。牛久市中根に中坪・岡見に下坪台、小坂に荒地坪・西ノ坪・和田坪、美浦村舟子に東坪・中峰。常総市豊岡町の大峠(オオビヨウ)・大峠畑合、つくば市古館に中峠(チカビヨウビヨウ)・中峠下、中ビヨウ、取手市野々井に東坪・南坪・中峠(チカビヨウ)。

駄弁 中峠：不思議なことがある。平地や低台地に峠地名があり、それをビヨウと発音するところもあることだ。峠にふさわしいところか、中の峠とは何か、なぜ、峠がビヨウか。隣の我孫子市にある利根川近くの大字中峠(チカビヨウ)を調べてみよう。「中峠城と呼ぶ中世城址があり、三郭が東西に連なる遺構が想定されている。」(千葉県の地名。郭は、城または砦などの周囲にめぐらして築いた

土や石の囲い。となれば、その内側は、「土手、土塀で囲まれた小域、ある範囲の狭い土地」の坪ということになる。東西に連なる三郭は、さしづめ東坪・中坪・西坪で、中峠はその中坪ということである。我孫子市にはそのほか、中里と我孫子に稲荷峠(イナリビヨウ)、新木に向峠(ムカイビヨウ)がある。これらの峠は「土手、土塀で囲まれた小域、ある範囲の狭い土地」の坪と見れば意味が通じてくる。ということは、ここでは、峠を坪の意味で使っていることになる。坪は音読みでビヨウ、峠の別字に峠がある。坪が誤記により峠、それを峠と書くようになったのではないかと想像を巡らしてみた。上記所在欄に、ビヨウや峠(ビヨウ)地名も付記したが、利根川を挟んだ取手市野々井の中峠は東坪・南坪と同じ概念であり、つくば市(旧谷田部町)古館は城館跡で、「中世に熊倉城があり、堀・土塁の跡が見られ、「土塁公園」計画中」とのこと。土塁に囲まれたところが、中坪↓中ビヨウ・中峠(トウゲ)だった。ここでは峠にビヨウの読みをあてることに抵抗があったことが読み取れる。常総市(旧水海道市)豊岡町の大峠(ビヨウ)・大峠(ビヨウ)畑合ももちろん大きな峠ではない。美浦村舟子に(中)峰(ミネ)があるはずはない。

志辺・志部・シベ

シベ＝大水

語源・所在 結城市北部の大字に、結城・結城作・五助・鹿窪。それぞれの小字に、湿辺、永志辺、志辺、南志部・西志部、以上ほぼ1ブロック。古河市大字恩名に小字志辺、上大野にシベ・北シベ・南シベ・古内シベ、稲宮に上大野シベ・上大野神辺(シベ)、葛生にシベ下・シベ台、境町大字蛇沼

に小字シベ、西泉田に志辺下・志辺(ほかに出水(デミズ)・水流(ミナガレ)、長井戸に志辺、伏木に志辺・志部、若林に志部・志部坪・志部西・志部下・神辺・神辺下・神辺後、岩井市寺久に志辺・志辺前・志辺後・志辺下。以上、ほぼ北南に帯状に続く。岩井市大字弓田に小字志辺・志辺勢至、猫実(ニヤウ)に志部・志部向、中里にシベ・シベ前、長谷に片神辺・上神辺。以上、ほぼ1ブロック。常総市大字豊岡町に小字志部、坂手町に志辺、内守谷町に仕辺・南志辺。以上、ほぼ1ブロック。そのほか、取手市に志遍、水海道市に志辺・仕辺。これらのシベ地名は、旧猿島郡を主体に、縄文海退以後の大水常襲地域だけに限られている。しかも、旧河川の跡地と思われるところに列なったり、囲まれたりした様子がうかがわれる。そのことから、シベには大水の意味があることは想像できるが、日本語にはシベという語彙はない。アイヌ語でも成語では【poro wakka 大水、洪水】で、シベとは結びつかない。しかし、それは近代アイヌ語には見られないということで、縄文時代あるいは、その後の縄文系在地民は大水をシベといていたのではなからうか。そこでさらに、アイヌ語での読解を試みると、【si 大きな】【be 水】があった。シベはアイヌ語には伝わらず、日本語にだけ引き継がれた縄文語であった。

転音 sipe→sibe

思川

オモイガワ＝川尻が入江になっている

川

所在・語源 稲敷市大字伊佐部に思河、行方市四鹿(シロク)に小字思井・思井下、石神にヲモイ。

稲敷市佐倉に思川。いずれもその地を流れる川に付けられた名が小字名になったものである。アイヌ語で【o.尻、川尻】【moy.入江】、尻が重いではなく、川尻が入江になっている川。前三者はドキツとするほど語源が的中しているが、佐倉の思川近くには川がない。しかし小松川という小字名があることから、往時には川があつたかもしれない。鹿島市大船津にも思井・思井根田、それは現在の御手洗川とその下流の干拓水田のことであろう。栃木県にも東部を流れる思川がある。大子町上野宮にある小字思川は高い山の上にあるという(菊池国夫『奥久慈・大子町の地名』。天の川になりそこねたか。

「種の永続」のために(1)

菅原茂美

人類という「種」を永続させるために、世界の人々は現在、何を為さなければならぬのか?何を為してはいけないのか?。

勿論、自然界において、人類だけが「特別の存在」ではない。人類とて、他の生物と、なんら変わらない。人類も単なる一種の生物にすぎない。それゆえ、他種を犠牲にして、人類だけが繁栄すれば、それでよい……というものではない。

この狭い地球上で、いかにしたら、人類が他の生物に迷惑をかけずに、共存共栄ができるか……と、いつもこの事が、頭を離れない。私などが、どれだけ頭を捻ったところで、易々と答えなど出るわけもないが、今日の世界の動きをみると、『これでもいいのか?』といつも首を傾げざるを得ない。

そんな時、一番先に、私の脳裏に浮かぶのは、アイヌ民族の「自然を敬う精神」である。他の民族は、自然から根こそぎ食べ物や資源を収奪する傾向があるが、アイヌ民族は、生活する最小限の食糧などを、自然から「分けてもらう」……という謙虚な姿勢だという。

アイヌ神話は、自然神が主人公であり、王権にかかると人間を主体とした政治的神話は、存在しないと言われる。アイヌは飢饉に遭遇すると、鹿や鮭を地上に下ろす神の不機嫌により、引き起こされると考える。その原因は、人間が自然の恵みに対する礼儀を忘れたためだとする。この考え方には、調査に訪れた世界の民俗学者達も、感動を覚え、世界に称賛して紹介しているという。

【日本では1899年(明治32年)「北海道旧土人保護法」を定め、酷くアイヌを侮辱したものであった。1997年、初めてアイヌを民族として認め、2008年6月、洞爺湖サミット直前、国会でやっと、「アイヌ民族を先住民とする決議」が採択された。国内で独立運動などを恐れ、政府は長年アイヌを抑圧してきた経緯がある。アイヌに対する中央政府の対応は、古くは日本武尊・坂上田村麻呂・源義家等、平穏な先住民を陥れた、いかがわしい朝廷の傀儡(かいらい)どもである。】
私がいつも70億の世界人口が平和に暮らす為には、もっとスローライフを取り入れ、自然から資源の収奪を防ぎ、何百年先の子孫達にも資源を残しておくなければならない……現在の地球は、未だの子孫からの預かりもの……といつも述べているが、アイヌの精神こそ、ギクシャクした今日の世界を救う「真の王道」と考える。人の弱みに付け込み、何でも奪い取ろうとする今日の世界風潮は、

厳に慎まなければならない。

* * * * *

さて、種の永続に関し、身近の憂きことの筆頭は、我が国の肝心要の「食糧自給率」だ。なんとそれはわずか39%(カロリーベース)にすぎない。先進国の中では最低。1966年には70%あつたのに、89年には50%を割り、近年は40%前後で推移。他国の余剰農産物を、無理やり買わされている。歴代政権は何を考えていたのか。

主な国の食糧自給率を見ると、カナダ223%、豪州187%、米国130%、フランス121%、ドイツ93%などである。国民の食糧を、最低限度自前で賄うことは、政治の基本中の基本であろう。輸出国で、異常気象などがあれば、すぐ不足をきたし、価格は跳ね上がる。何かの事情で、輸入がストップすれば、国民の生命の安全は、根底から崩れてしまう。国は食糧の安全保障政策を、何十年も、放ったらかしてきた事になる。

国庫補助で耕地整理をした水田が、至る所で耕作放棄。私は地方公務員を長くやり、国の会計検査で、随分厳しく絞られた。なのに、莫大な国庫補助を受けた耕地整理事業が、あのように機能していない現況を、どう説明するのか。国民が納めた税金の使い道を、軽視するものだ。集票目的の、バラマキ補助が、国民を無気力にしている。

8人分の食糧を10人で分けて命を繋ぐ。これなら何とかなる。昔から「腹八分に医者いらす」とも言われる。なのに、4人分しかないのに、10人で分けて食べる……とは何事か? 後の6人は黙って死んでくれというのか。米の転作でソバ等、種を蒔いても収穫しないのに補償金を出す。これでは、日本には真の農政はないと言われても弁解は

できまい。現在、世界人口70億人を養うためには、地球が1.4個必要と言われる。わが国は、食べ物捨てたり、水田を整備したのに、耕作放棄など、徹底して見直す必要がある。

原発についても、わが国は世界に名だたる地震列島なのに、金の亡者たちに押しまくられ、あの程度の安全基準で、あれほど危険なものを、列島の北から南まで網羅。「原子力村」といわれる「推進」と「規制」の両機関が同居し、経済第一・国民の命は第二の政策を堂々とまかり通した。国民の生命と財産を守る基本姿勢が、なっていない。

* * * * *

さて目を転じて、今、世界は何を焦って、こんなにも己の勢力拡大に奔走するのか？ 経済大国になることが、そんなにも大切なことなのか。環境汚染や、資源の枯渇など、まるで頭がない。先進国の技術盗用など、平気の平左衛門だ。正に、狂気の沙汰としか思えない。

人類は、万物の霊長などと、大層ぶって威張っていたいのなら、もう少し大局観でものを見、穏やかに、人類の未来をしっかりと見つめて、さすが大脳を膨らませただけある…と言われるように、真の大人になつてほしいもの。何百年か後の子孫達から、20世紀頃の我々の祖先は、全く愚かだったよなア…と言われたいために。

今、日本を取り巻く環境は、正に地獄絵さながら。北方四島・竹島・尖閣諸島：これらは、一体どうしたというのだ。日本の総理は一年しか持たない消耗品的な、根の浅い存在…と近隣諸国から見ると、攻め取るのは今だ…と、考えるのであろうか？ 足の引つ張り合いで、安定政権などほど遠い現状。国益優先ではなく、まず党利党略

が大事。そこが外国の狙い所なのであろう。

藩内で揉（もめ）事があれば、幕府は、直ちに「取り潰し」を行った江戸時代と同じことか？ 権力闘争に明け暮れ、政治が疲弊した、世紀末的現状の日本。これは、虎視眈々と狙っている強欲近隣諸国の絶好の餌食と言えよう。人間、どんな偉そうなことを言っても、何万年も原始の野を駆け廻って、「縄張り」を主張した野生時代の習性は、簡単には修正できないのである。日本の戦国時代、世界の植民地争奪戦、いずれも野生動物と変わらない縄張り根性の表れ。「人を見たら泥棒と思え」こんな世相は、あまりにも醜い。

更に加えて、わが国は借金大国・ろくな軍備もない・食糧自給率4割弱。こんなメチャクチャな国では、強欲な外国に付け込まれる。表面上は協調し合って、平和的に外交を構築する…など、単なる口先だけの話。隙あらば、奪えるものは何でも奪い取る。それがお隣さん達の本心であった…と見える。そのうち、隠岐島・沖縄も、元々は俺のものだ…と言いかねない。品格のなさ。開いた口がふさがらない。

「国境線」などというものは、欲の皮の突つ張った者同士が、一応争いを避け、互いに納得するための、仮のラインなのであろう。チャンスがあれば、いつでも己に有利なように変更したいのが本心。1952年の「李承晩ライン」の勝手な設定など、下心見え見えだ。日本は島国なので、国境線など、あまり身にしみて感じたことはなかったが、狭い所で、押し合いへしあいでは、境界線の変更は、正に死活問題である。今、イスラエルとパレスチナの争いを見ればよく分かる。又、中国は北極海の非沿岸国なのに、海底に国旗を立て

資源開発権を主張している。更に温暖化で北極航路（ロシア沖経由でヨーロッパと太平洋を直結）が可能なら、その優先権を主張している。更に月の表面の開発権も俺の物だと言っている。

一方、人間や動植物の、病気を国内に入れないための「検疫問題」だが、陸地が続いていたなら国境線など、あつてないようなもの。植物の種は風で飛んでくるし、動物は自由に行き来している。人は、隣国の方が少しは暮らしが良くなりそうだと、川を潜り、山を越えて越境してくる。そして、渡り鳥は、遙か遠国まで、自由往来である。狂犬病を媒介するコウモリなど、深夜の招かれざる客が、人間の浅智慧をせせら笑うかのように飛んでくる。アメリカがあればほど力を入れても、メキシコからの狂犬病というお土産持参の珍客を、どうしても排除できない。

宇宙飛行士は、地上の国境線など、ナンセンスに見えるに違いない。同じ民族が、38度線で睨み合うなど、人間の愚かさに呆れて、ものが言えない心境であろう。ただ彼等は利口だから、政治批判など、軽口を叩くことはしないだけ。

先日（2012年8月7日午後8時10分頃）、星出さんの乗る宇宙ステーションが、関東上空を、南西から北東の方角に向かって飛行するのを、孫たちと一緒にしみじみと眺めた。宇宙船は、金星よりも明るく輝き、実に神秘的で感動的であった。私は孫たちに国際協力で、宇宙船が果たしている役割を説明し、人類は永遠に仲良く暮らす為、そして、地球や宇宙の未知の世界を探検することの重大さを話した。宇宙飛行士が大所高所から見たら、地上で人類が、いがみ合ったり、戦争する等の愚かさを、どれほど強く感じるのか…と。

* * * * *

さて首題に戻って、それぞれの種が、互いに迷惑をかけることなく、この世に永続すためには人類はどうあらねばならないかを考えてみたい。

現在、地球上に生きている全ての生物は、過酷な環境の変化に耐えられるように、進化を遂げた「勝者たち」である。変化についていけなかった者は、結局、子孫を残すことはできなかった。即ち、今日まで生き残った者は、偶然や運が良かったからではなく、刻々と迫る環境変化（気温・食べ物・天敵など）に、群れの中で、それに適応するように遺伝子変換した者のみが、子孫を残す事ができた。そうして生き残った生物を、人間の都合で、絶滅に追いやるなど、以ての外である。

地球は、火山噴火やプレート移動の他、地軸の傾き、公転軌道の離心率の変化や太陽活動の周期性などにより、寒冷化や温暖化を何遍も繰り返した。しかもその期間は、何万年も継続し、中緯度地帯まで氷河に覆われた時代もあり、生物は、栄枯盛衰を繰り返した。

動物はもし、周りに適切な食糧がなくなれば、他へ移動するか、別の食べ物に変換せざるを得ない。それができなければ、その「種」は滅びてしまう。食べ物の変換で生き延びた実例は、中国のジャイアントパンダである。

【ジャイアントパンダ（中国名「大熊猫」）】

パンダとはネパール語で「竹を食べるもの」という意味。中国の四川省など標高2700mから、3900m地帯に生息。分類上はネコ目（肉食目）クマ科。クマ科でありながら冬眠はしない。

19世紀末、西洋人がパンダの毛皮と骨格を持ち帰り、フランスの博物館に展示したことにより、

毛皮目当ての狩猟ブームとなり、絶滅の危機に瀕した。現在は中国や国際機関の保護活動により、1600頭まで回復した。

さて、パンダはもとクマ科であり雑食性で、昆虫・小動物・魚などに植物が主食。それが氷河期に、食糧の豊富な地域に移動することができず、竹のみが繁茂する高地に取り残された。栄養の少ない竹を主食として、生き延びざるを得なかった。しかも竹は、60〜120年毎に「一斉に開花枯死」するので、何度もパンダは絶滅の危機に瀕した。

《竹が一斉に開花枯死する理由》

普通の植物は地中の肥料成分を、根から吸い上げ葉に送り、光合成で作った栄養分を「幹」に蓄え、成長していく。しかし、根から吸い上げた微量元素は、葉にも残っており、落葉して再び根本に還元され、必要な元素は循環する。ところが竹は、葉に微量元素が残らず、全て幹に蓄えられる。

竹はいくら落葉しても、貴重な微量元素が根本に戻らない。土地にもよるが、竹藪は60年以上もすると、完全に土壌は栄養失調になり、枯死寸前となる。そこで竹は生き延びるために、一斉に開花して、その「実」に次世代の命を託し、竹林は枯れる。やがて実が芽を吹き、枯れて腐った親竹を肥料として、新たな生命を復活させる。《

更にパンダは、竹の小枝や葉を食べるためには、竹を手で握り、口で葉を食いちぎるほかない。そのためには、猿等のように親指と四指が対向しなければ、物は握れないが、クマ族はそんな器用な手は持っていない。そこでパンダは、撓側種子骨（とうそくしゅしこつ指と手首との間の骨）という骨が変形、突起を出し、これがあたかも人の親指の役目をなし、対向する五指とで、竹をしっ

かり握ることができるようになった。更に、栄養分の少ない粗繊維主体のタケを消化するために、クマより腸管が長く変化した。このように環境の変化に応じ、遺伝子変換がすっかりできたので、生き残ることができた。

なお、パンダは、ササやタケが主食であるが、「笹と竹の違い」は、細いのが笹で太いのが竹とは限らない。その逆はいくらでもある。和名「メダケ」や「ヤダケ」は笹であり、「オカメザサ」は竹である。違いの基本は、タケノコの皮（稗鞘・かんしょう）が、その年のうちに落ちるのが竹であり、落ちないのが笹である。

また、中国からのパンダレンタル料は、現在、一組で年間一億円であり、自然死と証明できなければ、死亡した場合、一頭当たり五千万円の賠償額を支払わなければならない規約となっている。

* * * * *

さて昭和54年に高知県で最後の生存確認以来、姿が見られなかったニホンカワウソが、先日、絶滅種に登録された。エゾオオカミ・ニホンオオカミなど、人間活動の愚行により、幾多の生物が、この地上から葬り去られた。

種の永続について最後に私が重ねて言いたいことは、人類に限って、種の絶滅などあり得ない：と考えるのは甘い。今、世界の主要国は、全人類を何度でも殺害できるだけの大量破壊兵器を、タツプリ貯め込んでいる。まさか、それを本気になって使用するほど、人類は愚かではないと思いたいが、過去の歴史を見れば、「超愚行」を、何度も繰り返してきた。人は、どんな紳士面をしていても、一皮剥けば、悪魔が潜んでいる。今日のように、世界中が資源の奪い合いや、勢力の拡大を狙

って、紛争が絶えなければ、いずれは共倒れとなり、哀れな終末を迎えることとなる。

更には、人命を救うつもりでの抗生物質の開発は、かえって有用菌まで殺し、更に耐性菌の出現で、抵抗力の弱い人類へ襲いかかり、これも哀れな終末が予想される。生活に便利な数々の化学製剤が、知らず知らずの間に人間の活力を奪い、人間の活力が失われていく。自分で自分の首を絞めている。

人類は永続したいのなら、過剰なまでの経済発展至上主義を排し、スローライフを取り入れる事。資源の枯渇を防ぎ、種の多様性を乱すことなく、他の生物の種の存続にも深く心すること。そして、アイヌ民族のような、自然を敬う精神を忘れない事こそ、人類が永続する基本中の基本と考える。

争いは絶えない

伊東弓子

今、日本は韓国との間に竹島が、中国との間に尖閣諸島が問題の噴煙を上げています。本来は誰の物でもなかったものだ。人が誰かの為に造った物でもない。何時の頃からこうなったのか。古く採集、漁猟時代にも起きていた事だろうが、生物はそういう中で仲間を増やしていったのだろう。これも生きとし生けるものの脱皮出来ない習性であろうかと思う。

故郷にも様な事がある。田・畑の境、屋敷境の事、荒れ放題の山境の問題等限りなくある。支配された玉里御留川を巡るいざこざも日常茶飯事だった。訴状の多かったようで藩の者同志が揉め事を吹っ掛け合い、守る事に必死の人達、追求し

て和解をすすめていく人の姿を思い出した。あのページを開くと「五〇 高崎村小漁場へ小多組立一件内済につき口上書」「一〇三 小川御手船による御留川大網破り一件」「一一四 御留川大網破り出入一件」等に登場する。当時（三百二十年前）の漁に携わった人々の姿を思い、漁場といわれた場所の今の状況を見に行く事にした。

台風が近づいている天気予報を耳にするので出歩くのも躊躇したが「この日しかない」と決心し出かけることに。ねずみの色の雲が空全体を覆い、一段と濃い色の雲の塊りがあちこちにあり、不安の中出発した。

「五〇」高崎村小漁場での出来事であった当たり立つて、どの位大きな小多を組んだのか、人目につかない時間を見計らって組立てたのだろうかかと想像してみた。御留川の西境は小漁場といって高崎、石川の村持として西村の漁師が自由に漁をする場所だった。にも拘らず御留川の下請人達が小多を組立ててしまった。そのもめごとの処置を任せてほしいと当時に大山守・福田伊平太・玉里村が郡役所へ願ひ出た文面である。今堤防内は水田となつていて、当時大きな谷原で恋瀬川は高浜消防署当りを真直ぐに御留川に流れ込んでいたのだから雄大で、且つ豊かな漁場であつたろう。こんな良い所見逃す手はない。と始まったに違いない。今の江島水門、えんま、鳥居後の先回りかと足を運んだ。コンクリートに沿って草々が育っている。野生の紅い蓮が群生し、その先にも水草が生え鳥のさえずりや風が季節の歌を聞かせてくれるが、水は表面に水溜りの醜さを表している。山王川入口迄ずっと続いている。釣り人が釣糸を垂れる姿はあっても漁の舟は見えない昨今だ。

2012 CONCERT SERIES

ギター文化館は今年で20周年を迎えます。
魅力あふれるコンサート企画で皆様をお待ちいたしております。
どうぞよろしくお願ひいたします。

9月9日 里山と風の音コンサート

9月30日 高野行進 jazz live

10月6日 谷島崇徳・谷島あかねギターとピアノデュオ

10月7日 長谷川きよしコンサート

10月14日 ハープとフルートのコンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな
雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自
分の風を「ふるさとの風景」に唄っ
てみませんか。

オカリナの製作・オカリナ演奏に興味を
お持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

次の場所に向かって高浜、羽成子、石川、八木、三ツ矢、高賀津へと進んだ。「一〇三」の漁網破りの訴えのあった宮久保上川、宮久保下ノ川辺りを確認しながらゆっくり歩いた。堤防より山際迄田が続く。ここは漁場だったろう。屹度そうだ。御留川の境となる柵塚が右奥に見える。ある記録に「柵塚の下に波寄せて…」という一文があると、先生の話しを聞いた事もある。北の方に玉里の稲荷の森が見える。大井戸堤防周囲に植えた桜の木が大きくなった時、御留川境の目印である森は見続けられるだろうか。西浦中岸二十九、五キロメートル二十八、五キロメートルの立札の間に排水樋管、高津用排水機場、生活排水路浄化施設(四万十川方式、小津舟溜りと樋門)があった。水辺にはコンクリートの十メートル位の波除けが縦に七本、十メートル位の間隔にある。そこに続いて木の棚が二十八ヶ所も造られている。大部崩れた物もあるが波除けの用を足しているようだ。その一帯には草々が茂り木々も二十本位育っている。一部コンクリートを剥がした場所に生えた草々の所に砂地が出来ている。今迄走ってきて気がつかなかったが、ここで始めて心地よい波の音を聞いた。懐かしい音だった。水草に寄せる波、湖にかえす波の優しい音色だった。田の傍に四本の大きな柳の木に囲まれて水神宮があった。遠くに小津の部落の入口か、松の木と鳥居が見える。この地は土地の人皆が大切にしてきた事が伝わってくる。又訪れる日には地域の人にいろいろ教えてもらおう。この辺で起きた事は「当月十日」とある。十一月十日今でいう十二月だ。網を掛けていた所へ〇に水の字の旗を立てた二艘の船が小川尻から真直にまともに網にのりこんできたので、入らない様に頼んだが

知らぬ振りをしていた。結局二〇〇間も引き切られたのだ。小川御手船(水戸藩小川運送方役所に属す川船)は荒っぽく威張っていて川の上でも他の船から大部嫌がられていたようだ。その船は薪を積んで江戸へ向かった。どんな気持ちで行ったのか、途中の宿や顔見知りの友達には大法螺吹いていた事だろう。その後下請人達は貯えの網をおろしたそうだが、修理する費用もかかるだろうし、次の貯え網も必要だろうし、弱い者の苦しみや悲しみが聞こえてくるようだった。

その後はコンクリートにぶつかる水の音しか耳に入らなかった。田伏に入ると風が強いように感じた。空が暗くなった。水嵩が増えたのか橋げたが短く見える。橋を渡り出すと傘をさしては、自転車に乗れそうもなかった。見まいとしても欄干から下が見える。茶灰色うねりが次々にやってくる。高波が歯を剥き出し飛沫をとばす。こんな高い橋の上迄も体にかかるのもその一疋か、歩いては乗り、降りては屈みながら押し歩いて行く。恐ろしい一筋の道何んとしても向うへ着かなければと念佛を唱えながら繰り返して進んだ。漁をしていて急に変候が変わったり、恐ろしい日もあったろう。水の恐ろしさが伝わってくる。地獄の道を歩き続ける亡者の思いで急ぎ出したのは、塔が見えた頃で本当に安堵したのは浜の宿だった。あれは何だったんだらう。雲が引裂かれた様に切れて陽がさしていた。新たに渡ってきた橋を見た。

玉造は夢中を通り、浜から八木蒔、そして次の羽生に急いだ。先の上川、下ノ川と同じ「一〇三」に出てくる羽生地小淵での出来事の場合へと鼻歌交じりで走った。舟溜り、水神宮がある。干からびた魚が転がっている。この辺りは部落のすぐ近

くに鹿鉄の路線跡がある。桃浦とよんで賑わった海水浴があった所だった。漁場も近かったことだったろうと忍ばれる。この辺りで当十六日、五ツ時網掛していたところ小川御手船北浦御廻シ(小川から北浦の串挽へ廻す空の船)二艘が網の内に入ってきたので、入らない様にお願いと「船はすぐには戻せない」と梶にかかったあば、網、網を柄長鎌で引き破った。貯えの網もなく本当に困っている。下ノ川の一件から十日も経ってないのに、こういう事が続くと運上人の希望者が少なくなる事も心配ですと訴えているが、今でも市民の苦情を役所は早く処理してくれないのと似ているような気もする。

沖洲、川尻、園部川を渡ると川中子、下玉里に入った。「二一四」下玉里御留川での網破りの事思った。旧冬廿一日網破りがあった。網方みんなで追いかけていくと五丁田村の者だった。御留川まで連れて来ようとすると同村の人が和解に入ったので戻ってきたが、皆すつきりとせず不満はつのが真冬の最中随分寒かっただろう。網を造作したが漁期がせまっていた、漁は出来なかった。川守さんに中に入っていたいただき本人を調べてほしいという願いだ。悔しさや納得出来ない中で耐えてきたのだろう。その後の明治、大正、昭和、そして現代へと人は生き続けてきている。目の前の川はいつも人と一緒にあった筈、だから今の流れが汚れきっているのも今の人の姿を映しているのだ。と思う。

人のいる所必ず争いがある。争いに負けてもいい。負かされずにいこう。今年「玉里御留川」の立札が出来た。玉里の名所の一つに仲間入りした。市の各地区から桜の木

が堤防に植えられたのも今年だ。花が咲くのは大部先になるだろうが、この木を育てながら人の心も花に負けない美しさをもっていけるといい。傾いた夕陽を追って、夷の宮(夷神社)に向かってペダルを踏んだ。

ああ茨城県

小林幸枝

先日、都道府県別魅力度のランキングが報じられていた。昨年まで茨城県は最下位であったが、今年は上がった。と言つても下から二番目になっただけである。

でも茨城県はそんなに魅力のない県なのだろうか。日本三大集を見てみると、茨城県には随分と沢山の日本三大がある。ちよつと挙げてみよう。

日本三大河川||利根川

日本三大瀑布||袋田の滝

日本三名園||水戸偕楽園

日本三大貝塚||美浦村陸平貝塚

日本三大花火大会||土浦全国花火競技界

日本三大民謡||磯節

日本三大囃子||佐原囃子

日本三大稲荷||笠間稲荷神社

日本火防三山||岩間・愛宕山神社

・・・等々まだまだ沢山の日本三大〇〇がある。

なのはどうして魅力度が最低なのだろうか。これは現在の県民の文化度、文化力の問題なのだろうと思う。歴史的な遺産や伝統芸能などを見ていると決して文化度・文化力が低いとは思えないのだが...

ことは座の公演で、筑波山の耀歌(かがい)をモチーフにした手話舞劇を演じましたが、日本三大歌垣として筑波山の耀歌は古来から有名で、そこには日本でも屈指の文化力を見ることが出来ます。本当にいつからこんなに魅力のない茨城県になっておられるだろう。黄門様もさぞかし嘆いておられるだろう。

常陸國總社宮例大祭

兼平ちえい

去る九月十五、十六、十七日の三日間の石岡市街は盛大に華やかに、約四十一万人(石岡市観光課より)の見物のお客様をお迎えしました。

石岡のおまつりは数百年の歴史を誇るおまつりで、古来は武士階級が武運長久を願って行った神事が江戸時代以後、一般庶民の願いである無病息災、五穀豊穰を祈願する「まつり」が一緒になって広まったと伝えられています。

治承四年(一一八〇)伊豆に兵を挙げた源頼朝は佐竹氏追討(天矢橋事件)で常陸国に入り常陸総社に参拝したと言われています。

千三百年も昔、現在の石岡市は常陸国の国府が置かれ、繁栄を極めていました。国府の長官である国司は就任すると国内の神々を参拝(神拝)するのが習わしでした。この神拝すべき社を一箇所に集め祀ったのが総社と考えられています。このよくな古い歴史を持つ総社は地元の鎮守の宮として信仰されていました。明治三十三年に県社となり、常陸國總社宮として今に至っています。かつては神事として、厳肅に執り行われたと記

録にあり、次第に石岡の町民の祭りとして定着してきました。遠き歴史に想いを馳せながら、現世に生きる喜びを素直に表現し、すべての人が参加して楽しむ心を大切に後世に伝えようと、年番町の皆さんはじめ各町内の皆さんのご努力に触れ今までのおまつりとは違った雰囲気三日間を楽しみむことが出来ました。駅前御幸通りは片側だけの出店となり、前進して交わる左側の中町通り、右側の香丸通りは両側に店がありました。道路側の歩道を空け、歩行者道路が広くなり、山車同志や幌獅子の往来に余裕が感じられ、見物の皆さんもゆったりと楽しんでいるように思いました。御幸通りの出店のない側の各商店は賑わっていました。

初日はイベント広場午後二時半のお約束で石岡市歴史ボランティアの会の会員三人で、静岡から十二名のお祭り好きな五十〜六十代の男性の皆さんをお待ちしていました。少々遅れるとの連絡有り。段々空の雲行きが怪しくなってきました。石岡のおまつりの雨降り説は：見事の中でした。しかも神輿の出御の頃だったでしょうか。残暑とからから天気続きで乾いてしまった大地に龍神様と雷神様からの恵みの雨を頂いての始まりでした。時雨も止み午後三時、静岡の皆さんの到着です。

三班に分かれ、街中のメイン丁字路のところでは供奉行列をお迎えする事ができました。恵みの雨に洗い流された、清らしい大地を露払いのささらを先頭に、屋台の中で操られながら優雅に舞う三匹の黒獅子、私には優雅に舞うというよりは、ほのぼのとした滑稽さと愛らしさに見入ってしまうのでした。この富田のささらは京都の公卿烏丸家

からの伝来で幕にカラスの紋所があります。

さらの後に続く露祓獅子は土橋町と仲之内町の両町の獅子が務めています。いずれも歴史が古く、土橋町の獅子は嘉永七年（一八五三）愛宕の祭礼（年番守木町）の記録の中に「土橋 大獅子」の記述を見ることが出来、これによれば一五〇年以上の歴史があることが分かるそうです。仲之内町の獅子は明治二九年造之の刻名があります。獅子は大口を開け悪魔を払うもので（悪霊退散）、獅子舞は大きく口を開けることに大事な目的があるそうです。

やがて移されたご神体の神輿が白丁行装の年番町の力強い掛け声の若者にかつがれ、菊花紋を許された格式高い神輿に見物の皆さんも一緒に声掛け合って、喜びあいます。おまつりに詳しい静岡の皆さんは、神輿をかついでる若者達が被っている烏帽子に注目、他ではあまり見られないと、格調高い…と感心しきりでした。

おまつりを一段と華やかに、賑やかに盛り上げる山車は三層ものと二層建てとなっている。一層が高欄を回させた舞台となり、舞台では踊りと、囃子は笛と鉦のみで、太鼓などは側面に別に組立てられた場所で奏する独特のもの。静かな曲のおかめ、滑稽な仕草で笑わせる曲もリズムカルなひよつとこ、テンポの早いきつね、そして獅子が加わり、上層には各町自慢の人形が飾られる。

全国の有名なまつりに曳きだされる山車や屋台にくらべると、石岡の山車は絢爛豪華ではないけれど、ローカル色豊かで山車を曳く人々の熱気、リズムカルな囃子の音色と、賑やかさで、参加する者ばかりでなく見物の人たちも楽しませてくれている。

静岡の皆さんは特に、お囃子に興味をもたれ、拍手しながらの見学で、最後に、「田舎のおまつりの風情が残されていて楽しめました」とのことでした。

一年のうちの、たった三日間のおまつりを一心に楽しむ、これも郷土愛と言えるでしょう。

（参考資料 いしおか 昭和の肖像）

・曼珠紗華 ちよつとおしゃれに呼んでみる
・祭囃子 踊るコスモス ちえこ

【特別企画】

虚構と真実の谷間

第四章 霧の中の栄光（3・3）

打田昇三

甲斐国の南部にある南部から奥州糠部へ行くには富士五湖の畔を抜け、東進して武蔵国へ出てから源頼朝が奥州攻めをした際の中央軍のコースを行けば良い。一行が激戦の有った阿津賀志山を越えて奥州荻田郡に入ったときに、同行していた少年が馬上でフラフラし出したのを家臣が見つけ、光行に知らせた。行進を止め、馬から下ろすと身体が火のように熱い。長旅の疲れと気温の変化とで体調を崩し、熱を出している。田舎には病院も薬局も無い。見かけた農夫の家を借りて休ませたが一行を留めて置く訳にはいかない。如何にしたものかと光行が思索していると、農夫が「…土地の領主様を頼ってはどうか？」と言った。

聞けば、その辺りは中条氏が地頭に任命されて

はいるが、土着の小田島某氏が代官として治めていると言う。小田島は奥州藤原氏には従っていたが高齢で合戦に出ることを免れたため、源氏の支配下にも無事で居られるのだと農夫は説明した。

光行が、その頼朝公の命令で糠部に赴任する途中であることを説明すると、農夫は恐縮して、自ら領主・小田島氏の館まで知らせに走ってくれた。

暫くして数人の家臣を連れた小田島氏が来て、丁重に病人を預かりたいと申し出た。南部光行は小田島氏の好意に甘えることとし少年の身柄を託して任地に赴いた。その時に、少年の素性と生い立ちを伝えたのであろう。「源時義」と言う名が明らかになった。時義少年は小田島氏の屋敷で病いを治し元気を回復したのだが、南部光行の後を追わず陸奥国荻田郡に留まっていた。そして幾年かが過ぎた。時義を保護した小田島氏については余り記録がない。大和朝廷が奥羽地方を征服し始めた頃に遠征して来た大伴一族（荻田氏の支族）とする説と、関が原合戦後（佐竹以後）に府中（石岡）藩主となった六郷氏（鎌倉の重臣であった二階堂氏系）に属した武将に小田島氏の名がある程度のことしかわからない。

この、人騒がせな源時義が成人した頃、伝えられる年代では建久九年（一九八）に、先に述べた謎の多い家系、奥州和賀の豪族である和賀（源義治が後継者となる養子を探している噂が荻田郡にも聞こえてきた。都合の良いことに、和賀氏と小田島氏とは知らぬ間柄では無かった。一説では同族とも言われる。そこで、どちらとも無く小田島氏の許に居た源時義を和賀氏の後継者とする話が進められた。双方異議なく和賀氏第十一代の当主が誕生し源時義改め「和賀忠頼」と称することに

なった。源時義は既に小田島氏の娘を妻としていたから、俗に云う夫婦養子に入ったのである。

この「源時義」と言う、歴史的に全く知られていない人物のことは、その子孫と称する家系にだけ伝えられていることである。これで一件落着と云うか幼児向けのお話であれば「メデタシ、メデタシ」で終わらせても良いのだが、実はこの話で最も重要なことは、源時義が誰の子供であるか？という点になる。

既に述べたように阿津賀志山の合戦で抜け駆けの功名を顕した「河村千鶴丸」に対して源頼朝は兄が犯した死罪に当る罪を不問にした上、河村家再興を認める裁定を下した。頼朝には「千鶴丸」という名が猫に与える「マタタビ」の効果をする。

南部三郎光行が小田島氏に伝え、それを小田島氏が信じて多田源氏の和賀氏に伝えた源時義の幼名も千鶴丸であり過ぐる二十年前に伊豆山中の轟が淵に沈められた千鶴丸と同じ年齢である。多分、「このお方こそ、源頼朝公の嫡男・千鶴丸殿！」として紹介されたのだと思われる。どの大名も、

程度の差こそあれ「経歴詐称」ならぬ「御先祖詐称」をしているらしいから和賀氏を継いだ源時義が平清盛の子を名乗ろうが、武蔵坊弁慶の遺児だと言おうが勝手である。しかし、伝えられる話を総合してみると「源頼朝の子」とするのには熊蜂を熊の仲間に分類するぐらいの無理がある。

どうでも良いことなのだが、私も呆け老人生活で暇だけは有るので、その壮大な「嘘」を証明するために、ここで場面を二十年前の伊豆山中のビデオに切り替えることにする。登場するのは幼い千鶴丸、伊東家の家臣が五、六人、そして通行人のA、通常は安い時給のエキストラで間に合う通

行人なのであるが、この場合はAが主役になる。

普段は人の通らない山中の轟々と流れる谷川の淵であるから通行人も農家のオジちゃんオバちゃんでは無く、山岳修行中の山伏又は修行僧と言うことになる。場面は恐怖に泣き叫ぶ千鶴丸を、伊東の家臣が主の命令に抗し難く今しも谷底へ抛り込もうとする恐怖の瞬間である。

「待たれよ！」鋭い声に、伊東の家臣の手が止まった。「そなたたちは何をしておる？」修行僧は家臣たちを睨みつけて怒鳴った。山岳修業で鍛え抜いている僧には身に付いた不動尊のような力強さが感じられる。伊東の家臣たちは千鶴丸を下ろして、内心ではホッとしたような表情になった。

腰には太刀を帯びているから、目撃者を先に始末してから嫌な任務を果たすことも出来るが、そうさせない雰囲気かステージに満ちていた。準主役の家臣たちは、少ないセリフを丁寧にして千鶴丸が紐なしのバンジージャンプをさせられるに至った経緯を説明し、自分たちもこの任務は遂行したくないのが本心であると釈明したのである。

主役の千鶴丸は、幼な心に取り敢えずの危機が去ったことを感じたようで、放心状態ながらも泣き止んで地面にうずくまっていた。伊東の家臣たちは、それを見下ろしながら非情な主の伊東祐親の顔を思い浮かべて「どうしたものか？」思い悩んでいた。修行僧は相手に「嫌だ」とは言わせない気迫を込めた声で言った。

「この子は、拙僧が預かろう；そなたたちは任務を（こういう事態を任務と言えるかどうか疑問はあるが）果たした；と主に告げるが良い。証拠のためにこれを持って行け；」と言って、千鶴丸が着ていた着物の袖をむしり取って渡した。そして毅然とした

声で「神仏に誓って決して口外はせぬが此の子の将来の為に何方のお子なのか、教えて貰いたい；」と言った。家臣たちは自分たちには最も有難い方法で難問が解決出来た喜びから、千鶴丸の両親の名はもとより捨てられるに至った経緯を、良くセリフを覚えたと感じるほど細かく伝えたのである。僧は「分かった；」と答えると背負っていた笈（おい）を下ろし、中の荷を惜しげも無く捨てる。千鶴丸を抱き入れて軽々と背負った。「さらばじゃ！」家臣たちに声をかけた僧は道とは名ばかりの伊豆山中を北に向かって去って行った——中古ビデオはここで終わっている。千鶴丸を連れた僧は何処に去ったのであろうか。後で述べるが「千鶴丸の危難」に関する伝承は他にも何種類もあり、どれが本当か分からない。

その前に、重大な任務を無事に果たした（ことになっている）伊東の家臣は、旅の僧に言われた通り千鶴丸の遺品を主の祐親に見せて安心させたのだが、前後の事情から推定すると、その時期は先に述べた都での「鹿ヶ谷の変（多田源氏の密告による平家打倒の陰謀露見）」が有った一、二年前頃になる。そして四、五年後の夏に源頼朝が伊豆で兵を挙げて見事に負ける。伊東祐親は「それ見たことか、やはり俺が千鶴丸を谷底に放り込んだことは正解であった；」と自分を褒め、頼朝軍を追い詰めるために出陣をした。しかし何処で間違えたのか源氏の時代が出現してしまっただけだ。

治承四年の十月十二日に頼朝が鎌倉に凱旋してきたため伊東祐親は地元に住れなくなり、西に行つて平家軍に加わるうと、昭和の股旅演歌にも歌われた鯉名の港（下田と石廊崎との中間にある手右の港から颯爽と船出をするところを捕らえられ頼朝の

前に引き据えられた。本来ならばその場で処刑されるのだが、頼朝にとつては初恋の女性の父親であり、その息子が頼朝の危難を救ったこともあり、頼朝自身が富士川の決戦に出陣する直前でもあったので一まずは頼朝忠臣の三浦義澄に預けられた。頼朝の心では義澄の妻が祐親の長女なので折を見て助命嘆願に来るであろう、その場合にはマスコミを呼び新聞、テレビに報道させて許そうと思っていた。

ところが伊東祐親は「曾我兄弟の仇討」の原因を作った頑固爺いであるから赦免の沙汰を貰うと嫌がらせのように切腹をしよう。この場合、千鶴丸を助けた僧が名乗り出れば事情は変わっていたかも知れないが…これにより平安時代から続いていた伊豆の豪族・伊東・藤原氏は没落した。嫌われ祐親に代わって頼朝に仕えるのが、本来は伊東宗家の主となるべき立場を叔父であり義父である祐親に奪われ、祐親の孫(曾我兄弟)に仇と狙われる破目になった工藤祐経である。

その祐経は普通の田舎武士と違って都で天皇・皇族・貴族の身近に仕え、それなりの教養も身につけていた人物であった。源頼朝とは義兄弟に相当する間柄：伊東の爺さんの為に無理に夫婦別れをさせられた者同士でもあった。先に述べた建久元年の上洛に際しても行列の先陣、後陣に属さず、後陣の将の前に頼朝腹心で小田氏の祖である八田知家らと共に頼朝の周りを囲む礼装の従者(騎馬武者)として加わっている。いつの場合も常に側近中の側近の立場を保持していたのである。

さて、千鶴丸を亡き者にし、八重姫を奪い、拳兵した源氏に正面から敵対して痛い目に合わせた伊東祐親を赦免したことで、源頼朝は一回り大き

な人物になった。(祐親は、裏をかくて切腹してしまったけれども)それから七年後に、奥州征伐の阿津賀志山で河村千鶴丸が名乗りを挙げるまでは頼朝の脳裏に在った「千鶴丸」の記憶も薄らいでいたと思われる。勿論、千鶴丸が生きていたことを頼朝は知らない。その後の千鶴丸がどうなったかは徐々に述べるが、どうも、この話には裏が有りそうな気がしてならないのである。

怪しいと思うのは私の主観であるが、専門の先生方でも「疑問が残る」「疑わしい」とする説を残して居られる方が存在する。一方で、近代でも此の話を載せている史書は多い。公平を期すために、伝えられる説を拾い集め、断片的で申し訳ないが紹介しておく次のようになる。

「吾妻鏡」には伊東祐親が捕らえられて三浦義澄に預けられた際、同時に捕らえられた祐親の息子・祐清に対して「…先年の頃、祐親法師(出家していた 武衛(頼朝)を度り奉らん(殺害しよう)と欲せし時、祐親一男・九郎祐清、是を告げ申すにより、その難を逃れ給う…」と、まず頼朝は恩賞を与えようとしたことを記録しており、千鶴丸の事は出ていない。最終的には祐親も助命したのであるから千鶴丸殺害があったかどうか…。

「日本外史」にも「…頼朝、初め伊藤(伊東)祐親の家に倚(よ)る。事を以て相悪し。遂に頼朝を殺さんと欲す。祐親の子・祐清、密に之を頼朝に告ぐ。頼朝乃(すなわち)北条時政に倚る」とあるだけで千鶴丸は出て来ない。

「曾我物語」には「…頼朝十三の時、伊豆の国に流されておはせしに、かの兩人(北条・伊東)を打頼み、年月を送り給ひしに、伊東の次郎に女四人あり。…三、四はいまだ祐親が許にあり。中にも

三番は美人の聞こえあり。兵衛佐殿聞召して、汐の干る間のつれづれ、忍び忍びの棲をぞ重ねける程に若君一人出来給ふ」とあり、京都から帰って来た伊東祐親が、遊んでいる千鶴丸を見て怪しみ、流人の頼朝の子と知って逆上する。そして、「…今時、源氏の流人婿に取り、平家に咎められては如何あるべき…」と「…郎党呼び出して、若君いつわり寄せて、伊豆松川の奥に柴漬にし奉りぬ…」とある。これが話の基になるらしい。

「源平盛衰記」になると、平家の命令で都勤めを終り伊豆へ戻って来た伊東祐親が、自分の屋敷で遊ぶ千鶴丸を見かけて家人を問い詰め、頼朝と自分の三女(八重子又は八重姫)との間に生まれた子であると知る。「…源氏の流人を婿に取りて平家の御咎めあらん折りは、いかがは申すべき…」と怒った祐親は「…雑色(ぞうしき)二人、郎等(ろうどう)二人に仰せ付けて彼の少子呼び出し伊豆の松川の奥、白瀧の底にふしづけにせよと云いければ…中略(雑色郎等ども…悲しけれど…泣く泣く抱き取りて彼の所に具して行き、ふしづけにしてけるこそ悲しけれ)」とある。

この場合「郎等」は伊東の家臣であるが「雑色」は下級役人を指す。流人の子ではあるが罪の無い子供を殺すのに、何の官職も持たない伊東祐親が役人を使える筈が無く、殺害方法に「ふしずけ柴漬け：川底に沈めて上から枝の束を置く」を指示しているのも、わざとらしい。どうも、この話は頼朝が政子夫人と結ばれる際に、北条時政の娘三人のうち、長女は先妻の子、妹二人は後妻の牧の方の娘：誰を選ぶか、将来を予測して忠臣の藤九郎盛長が悩む…その前座話のように思える。

そして明治の文豪・幸田露伴が残している「頼

朝」という作品には、千鶴丸が谷底に放り込まれる際に地元の来宮神社の樟の枝を握らされ、遺体は其の俣で下流の川奈港に流れ着いた経緯が書いてある。ただし文豪の大先生も、どうしようか迷ったようで「傳奇的な傳説」として山道を通りかかった僧が千鶴丸を助けたことを付記している。

千鶴丸が中心になるこの段階で主人公が谷底に放り込まれたのでは話が進まないで、自説を曲げるようで心苦しいが、私も本意ながら「生存派」に入れて貰うことにする。ただし既に述べたように、私は千鶴丸が源頼朝の子だとは思わない。これは母親の八重姫が浮気をした、とか言うことでは無く、これから進める何ともややこしい話に関わってくる。事の真相を明らかにするには、千鶴丸を助けてくれた旅の僧を探さなくてはならない。駄洒落に近いが、そうは言っても何処の僧か分からない僧を探すのは、そう簡単では無いから伝えられる幾つかの説を並べてみるしかない。

「一般的に」と言うのも不自然であるが、先に紹介したように、伊東のジジイに殺されそうになつた千鶴丸は、頼朝の乳母で伊豆流人であつた二十年間を通して庇護して来た比企尼に助けられるのが、ごく自然なように思われる。危機を知らせたのは八重姫の兄・伊東祐清であり、祐清の妻は比企尼の娘である。千鶴丸は乳母に抱かれ、祐清が選んだ何人かの武士に守られて伊豆を脱出し、比企尼が選んだ何処かに匿われる。その際に僧侶か修験者か、山道に詳しい人物が頼まれて手助けをしたのかも知れない。

もう一つ、似たような内容だが千鶴丸の危機を知つた比企尼は（伊東祐清の知らせで）比企家の家臣である斎藤五郎・六郎兄弟を伊豆山中に急行させ、

主人の嫌な命令に、どうしようか悩んでいた伊東の家臣から千鶴丸を受け取る。ここから先に二説あつて、Aの説では斎藤兄弟が伊豆を脱して甲斐の国へ行く。Bの説ではビデオに収録されたように通りがかりの山伏（修験者）が助けて出羽国へ行き、斎藤兄弟に育てられ、後に甲斐の国へ行く。その他にも似た様な内容で少しずつ違う話が幾つかあり、中には生まれたのは女の子であつたとか、死産であつたとする説もある。

この辺は頼まれた系図屋も苦心をしたと思うが本来は多田源氏であつた奥州の和賀氏を、途中から源頼朝の血を引く千鶴丸の子孫として作成された系図では、波乱万丈をアレンジするためB説に近い話が挿入されたのであろう。危機一髪で旅の僧に救われた千鶴丸は出羽国で在地の武士に育てられ、やがて甲斐国へ行く。その間に斎藤兄弟が介在し、甲斐では武田一族の逸見長義が「源氏所縁の子」として養育し、七歳の折りに「源時義」と名乗らせた。逸見氏は甲斐源氏の惣領ではあるがその地位を武田氏に譲つた家系である。逸見氏は甲斐の北西部を本拠にしていたらしいので現地の教育委員会に問い合わせていただければ、当時のことは何も史料が無いらしく回答が来なかつた。

先に和賀氏のことを述べた際に紹介した「小野寺盛衰記」にも「頼朝の落胤の如く伝えあれども史家多く之を疑つてゐるし、和賀氏は従来、多田氏と称し」とあるから、本来は清和源氏の嫡流であつた多田系の和賀氏が陸奥国の一地方に埋もれている中で、源氏の傍流から本流に伸し上がつて来た頼朝が奥州まで支配し、諸大名が顔色を窺う時代になつた。折しも甲斐源氏の南部三郎が連れて来た青年を和賀氏が養子に迎えることにな

り「千載一遇の好機」を捉えた。そこで半ば伝説化していた「千鶴丸」を降臨させて和賀氏は源頼朝の後胤であると主張したのであろう。和賀氏は豊臣秀吉の奥州支配で滅亡してしまふから現在まで伝えられることは少ない。既に述べたように明治維新まで残つた支流が必要以上に「俺は源氏だ！」と主張していて、源頼朝伝説なども支流が勝手に伝えてきたと思われなくてもない。

本流の和賀氏については岩手県北上市の郊外に本城「二子城（別名・飛勢城」とばせよ）」の跡が残っているけれども北上市が立てた案内には源氏とも平家とも書いてなくて、既述したように大伴氏系と見られる苅田氏と同族の「小田島氏が和賀氏を称した」としている。これは源氏系和賀氏に後継者が絶えて、それを苅田氏系の小田島氏が継いだことの裏付けであり丁度、良い塩梅に南部三郎が甲斐国から連れて来た源時義が其処に入り込んで誰も文句は言えない。問題は源時義が伊豆山中で助けられた「千鶴丸」であつたかどうかであるが、当家の言い伝え以外に証拠はない。

飛勢城が築かれた場所は北上川の岸に位置する古代からの枢要の地であり、城の建造物は無いが当時の地形が完全に残る城跡には神社が建立されている。また北上市に隣接する和賀郡和賀町（市町村合併で変わったかも知れない）には和賀氏の重臣（岩崎氏）が居たそうで没落した和賀氏が結集して再起を図つた城としても知られている。城跡に地元の公民館が置かれ、手前の堀跡に架けられた橋の擬寶珠（ぎぼし）には和賀氏の家紋が正確に復元されている。地元の歴史を残すというのはこういうことであり、整地したり荒れ放題にした場所に「歴史」を付けても意味は無い。

東北地方には民俗芸能が多く伝えられており、各地に独特のものを残している。その中の一つである「鬼剣舞（おにけんばい）」の本場が和賀町であり、侍衣装に狐面などを被った踊り手が勇壮な舞いを見せる。踊り手は鎧胴を着ているが胸部に大きな「笹龍胆（ささりんどう）」の紋が付いているのが「和賀鬼剣舞」の特徴である。笹龍胆は代表的な清和源氏の家紋とされるから当然のことなのだ。擬寶珠に残る家紋は笹龍胆ではない。

水戸黄門の印籠のように、やたらと見せている家紋だと説明はし易いが、絵を文章で示すのは難しい。下岩崎城跡（擬寶珠）に復元された和賀の家紋は「立ち合い雲に四つ整（たちあひぐもによつしだたみ）」という。丸囲いの中央にオセロを五個並べられるように上下左右に白い四角を置き（中央空聞）その左右上下に、尖った方を下にして人魂のような雲の模様を六個配する。大きさは下、上、中の順になる。雲であるからお粗末でも渦巻模様が必要であり入道雲のように立ち姿である。この面倒な紋と笹龍胆がセットなのである。

笹龍胆は時代劇などによく出てくるが四つ整紋は十字架の出来損ないと間違え易い。和賀氏の家紋も「雲」を上手に書かないと「人魂」に見えるから、ドラキュラの墓標のようで謎めいている。古来の名族ながら時代の変遷に伴って衰退し、平安時代後期から多田源氏が継承した後、荻田系の小田島氏が入り、さらに地頭として赴任して来た諸氏が関わりを持った家系であれば、源氏の笹龍胆と別な家紋とを併用する事情は分かる。では、この「四つ整」は何を表しているのか…。

和賀一族の言い伝えでは、伊豆時代の源頼朝を慰めようと源氏に心を寄せる武士たちが集まった

際に破れた陣幕の継ぎ目を見て一同が「源氏再興」の想いを強くした―その象徴である、とされているけれども、その会合というのは「曾我兄弟の仇討事件」の原因になった狩りであろう。既にこのシリーズの第三章前編で述べているように、平安全盛時代の軍事訓練に相当する狩りに、流人の頼朝を参加させられる訳がないから嘘である。

この「四つ整」こそ「千鶴丸伝説」に基づき和賀氏が創作した家紋であろうと思われるが、その元になったのは古来の和賀氏が使用していた家紋

であったような気がする。つまり古来の家紋をアレンジして「千鶴丸」に結び付けた：先ず、千鶴丸は、どういう訳か甲斐国で育てられた。武田の家紋は有名な「武田菱」である。その武田でも逸見氏が深く関わっていたようで、逸見氏の家紋は「十字」と言われる。さらに千鶴丸を守って甲斐に連れていったのが斎藤兄弟で、藤原系の斎藤氏は家紋に「整」を用いたらしい。

コジツケのようだが、この三つを合体させると「十」の上下左右に四角い石を配した（中央が抜

ふるさと風の文庫 新刊ご案内

近日発売 打田昇三著『虚構と真実の谷間』

記録された、伝えられる歴史とは勝者の記録!! 勝者の記録から敗者の歴史を知ることこそが歴史を学ぶ意義。ふる里を思う打田史学の最高傑作「虚構と真実の谷間」(千枚) 堂々の完成。
(定価：上・下巻各 1600 円)

近日発売

『ふる里の七十二侯に一行の呟いて七十二相』

詩文：白井啓治 相絵：兼平ちえこ

懐かしきふる里には懐かしき四季があり、懐かしき二十四節気がある。そして、懐かしき二十四節気には七十二侯の言葉がある。
(定価：1600 円)

好評発売中新刊

打田昇三全集全 6 巻 (各巻 1 2 0 0 円)
兼平ちえこ作「歴史の里いしおかめぐり」(定価：1 2 0 0 円)
菅原茂美作「遥かなる旅路 (50 投稿記念)」(定価：1 2 0 0 円)
白井啓治詩集「寒蟬 (かんせん)」 (定価：1 5 0 0 円)

ふるさと風の文庫は、ギター文化館 (全刊)、石岡街角情報センター (一部) にて販売しております。

けた「整（石畳）」になる。その両脇に苅田系小田島氏（大伴系）の家紋と推定される「雲」を入れ、丸で閉じれば和賀氏家紋の「立ち合い雲に四つ整」になる。しかし、これでは肝心な「源氏」を主張出来ないから、多田源氏が使っていた「笹龍胆」を併用することにしたのであろう…これは、あく迄も私個人の推測である。

こうして和賀の家系は「源頼朝の後胤」として続くのだが内容に怪しい点が幾つかある。史書にも「？」を付けたものが多い。人類の祖先は猿に辿り着くらしいから、家系など本人が言う通りにして置けば良いのかも知れないが、これを歴史の立場からみると、やはり真実が伝えられるべきである。そこで和賀氏の家系に幾つかの疑問を呈させて頂く。疑問の根本は「和賀氏を継いだ千鶴丸こと源時義は、源頼朝の遺児であったのか」という点である。和賀家に伝えられた文書によれば建久九年（一一九八）に、頼朝が善光寺へ参詣に行った際に親子の対面をしたことになっている。

田舎芝居でも「おとつちゃん」「倅か」と涙のうちに父子が肩を抱き会う、一番の見せ場であろうけれども、建久九年という年は頼朝が謎の死を遂げる前年である。吾妻鏡にも、その頃の記録がゴツリ抜け落ちていて、何か異様な時期であり、頼朝が善光寺に出かけた記録も無いし、そのような暇も無かったと思う。正月には後鳥羽天皇が退位されて三月には四歳の土御門天皇が即位したからその儀礼もあつたらうし、この年には畠山重忠の従兄弟である稲毛重成の夫人が亡くなっている。この女性も多分、政子夫人の妹であろう。その葬式もあり、重成は妻の追善供養に相模川に架かる橋の大修繕を思い立ち頼朝は是を許した。

その落成式に頼朝が暗殺されるのだが…さらに当時のことを記録した年表に「二月五日に幕府が六代御前を鎌倉で斬つた」と書かれているが、この年代は誤りと思われる。六代御前が斬られたのは文覚上人との関わりで五、六年後のことになる。建久九年という年は、何かが起きていたらしい。くどいようだが千鶴丸と頼朝との善光寺対面は有り得ない話なのである。

ここに登場した六代御前は、平家の生き残りであり清盛の直系であるから斬られても仕方が無い立場だが捕らえられた時は未だ十二歳の少年である。それも、かつて頼朝が命拾いをした際に池禅尼に頼まれ、清盛に助命を進言してくれた重盛の孫である。それを頼朝は無残にも斬らせた―その崇りで頼朝も死ぬ―一般的には、そのように思われているのだが「平家物語」や「源平盛衰記」では次のように記述している。

平家が居なくなった都には北条時政が頼朝の代官として来ていた。「平家の子孫と言われる男子が居たならば、漏らさず知らせるべし。褒美を与えらる」という触れが回り、都では賞金目当てで疑心暗鬼の人々がうろろしていた。庶民の子でも色白で、不細工な親に似ない良い顔をした子供が見つけ出されては殺害されるような事態も起きていた。そういう事例もあつて、平家ゆかりの者は大方、捕まつたと思われていたのだが、三位中将平維盛（富士川の戦いなどで負け、出家した後那智で入水自殺）の遺児で桓武平氏の嫡流になる六代御前の消息が分からなかった。

そうした折りに平家に仕えていたと思われる一人の女房が、現在の京都・東山区にあつた六波羅に陣を構える時政の許に密告してきた。「六代御

前が洛西の菖蒲谷に在る山寺に隠れている」という。直ちに偵察隊を派遣して調べると、或る僧坊に不似合いな女官たちが大勢、潜んでいるらしくて、ひっそりとはしているが寺院には似合わない雰囲気がある。偵察隊が暫く様子を見てみると一匹の仔犬がちよろちよろと庭に走り出し、それを追いかけて気品のある少年が出て来た。すると数人の女官が慌てて後を追う「いけません！他人に見られたらどうなさいます！」と、少年と犬とを室内に放り込むように収容した。

偵察隊の報告により翌日には北条の軍勢が菖蒲谷を取り囲み「鎌倉殿の御命令により維盛卿の若君・六代御前を北条時政が御迎えに参つた」と丁寧な口上ながら逮捕に来たのである。維盛の未亡人や女官たちは愕然として顔色を失った。鎌倉に連れて行かれ、頼朝が確認した後に首を斬られることは確実だからである。抵抗も出来ず六代御前は時政の手によって大事に捕えられたのだが「母は強し」で、女性陣が頼朝に顔の利く文覚上人に助命嘆願を頼んだのである。疑い深い頼朝は洪々承知をして文覚に身柄を預けた。それが頼朝の奥州侵攻の頃である。鎌倉へ送られる筈の六代御前は「源平盛衰記」では文覚の許で出家して命拾いをするのだが「平家物語」では、一旦は助かりながら二十年ほど後に（北条氏に）斬られたとしている。これは後鳥羽上皇に嫌われて島流しにされた文覚上人の悲運に重なっているのである。

さて、奥州和賀の豪族の家に伝わる千鶴丸の話から、滅亡した平家の生き残り「六代御前」の話にすり替わったことをお詫びしなければならぬのだが、実はこの六代御前の受難と千鶴丸の危機とが奇妙に合致している。何よりも驚くのは伊豆

で九死に一生を得た千鶴丸を匿ったのは齋藤五郎・六郎の兄弟であるが、平家の滅亡後に洛西の潜伏地に居た六代御前に仕え、北条時政に捕らえられた六代に従って同行するのも齋藤五郎・六郎兄弟なのである。別人か同一人物か：名前の偶然の一致で済まされるであろうか：そして北条時政は齋藤兄弟に対して実に親切である。逮捕された六代の家臣であれば、その場で斬られても文句が言えないのに「六代にお供する旅が」遠い道で疲れるから：」と馬を提供しようとする。兄弟はそれを辞退し足を血に染めながら従って行く。

単純に考えれば齋藤兄弟と北条氏とは何らかの関わりがあることが推測され、そこが問題ではあるが、国文学専門の先生方の説によれば六代御前に関わる章段は「平家物語」冒頭に展開する「諸行無常」の完結のような含みもあるらしい。そのため「齋藤兄弟」という存在は、宗教的な語りが平家物語に取り込まれる為の重要な狂言回しの役目であった。したがって、実在したかどうかなどは、現代の政治家の資質と同じで問題にならなくなる。其処に出て来れば良いのであるらしい。

話のレベルが落ちたところで、本筋に戻すと、奥州和賀氏に伝わる「源頼朝の落胤説」にも、その頃に起きた貴種没落の裏話が上手に取り入れられているのではなからうか：極端な発想をすれば和賀氏を継いだ人物は平家の六代御前であったかも知れなくなる。その場合には平家の俣では何処かで尻尾が出るので、それを強引に源氏にした。それも中途半端な源氏では無く源頼朝にして家紋に纏わる話やら千鶴丸の生存説を作りあげた：

もう一つ気になるのは、千鶴丸の育てられた場所が「甲斐の国」ということである。なぜ、甲斐

なのか？武田氏を中心とする甲斐源氏は、頼朝が伊豆で挙兵する頃には「源氏に付くか」「平氏に従うか」決心が決まらなかった。それを説得して味方につけたのは北条時政である。強固な団結を誇る甲斐源氏は、富士川の戦い、木曾義仲の追討などに目覚ましい活躍をして源氏再興に寄与した。

それにも関わらず、と言うより、その力を恐れた頼朝は甲斐源氏の力を抑える目的で中心人物の一条次郎忠頼を鎌倉に呼びこれを謀殺した。寿永三年（元暦元年・一一八四）六月のことである。忠頼に全く罪は無く頼朝もそれを認めている。これにより武田氏の力は弱められたが、豊富な人材を誇る甲斐源氏は加賀美遠光、小笠原長清、秋山光朝、南部光行らが幕府の信任を得ていた。なお一条忠頼の暗殺を命じられたのは曾我兄弟に討たれた工藤祐経であるが、理由の無い暗殺に躊躇して討つことを躊躇い、別の武士が討っている。

これもまた何の証拠も無い意見のだが、もしかして千鶴丸は一条次郎忠頼の遺児ではなかったらうか：頼朝の執念深さを知る武田一族が、一条氏への迫害が及ぶことを憂慮して身分を隠し密かに武田系の惣領である逸見氏の許で育てた。成人して源時義を名乗った千鶴丸は奥州に赴任する南部光行に従い新天地を求めて奥州へ行った。その時に北条氏が密かにこれを支援した。その為に話の中に齋藤兄弟が出てくる。しかし旅の途中で病いに罹った時義は地方豪族の小田島氏に救われ、その一族として暮らすうちに和賀氏の養子となる話が来た。未だ頼朝が生きていたから、身分は隠していたのだが、北条氏が頼朝を暗殺してくれたので、自分の身分を公表することとし、其れまで我慢をしていた分を利息にして「源頼朝の御落胤」

ということにした一万歳。

(続く)

コーヒーフレイク

ちよんまげ異聞

菅原茂美

武士がちよんまげを結わないとどうなるか？ 日本史研究家の磯田道史氏の随筆によると、そのような文献はめったにないが、彦根藩2代目藩主井伊直孝は、お目見えの時、家中兵法者の上泉権左衛門が、髪を結わず長髪で登城した。当時薬師（医師）や兵法者は長髪が多かった。しかし殿はそれが気に入らなかつ、閉門（自宅軟禁）を申しつけた。結局、上泉は彦根を辞去し、尾張徳川家に仕えた：という資料が慶応大学図書館の古文書にあったという。17世紀前半頃、成人男子の識字率は、15%ぐらいなので、不要不急の記録等めつたに残らないという。

戦国時代、ちよんまげを結うのは、激痛を伴った。武士は逆上を防ぐため、流血・流涙で頭髪を抜いて月代（さかやき）を整えた。更に頭頂の毛を抜くのは兜をかぶったとき蒸れなためであり、戦闘の準備行為で、関節的には主君への奉仕を象徴していた。故に長髪は主君を無視するものと捉えられた。剃刀で剃るのは秀吉以降と言われる。

【風の談話室】

一夜明けての、宵越しの名月を見た。明けの前まで吹き荒れていた台風も北へ走り抜けて、やっと静かな眠りが出来ると思つた矢先、お犬様がフンと朝の散歩をせがみだした。前夜の散歩は風が激しくなってきたのでちよつと道路に出たらすぐに帰ろうと言つて中断してしまつたものだから、台風が抜けた途端にトイレ散歩に出なくなつたのだらう。

外は未だ薄暗いと言つのに仕方なく、散歩に出かけた。天を仰ぐとまだ暗く、しかし曇一つない。東の方の稜線は薄らと茜を刷き、神秘的な雰囲気をつくり上げている。

西の空を見ると、昨夜見られなかつた中秋の残月が僅かに朝焼けを映して金赤の笑顔になつていた。まさしく百万ドルの笑顔である。早起きは三文の徳と言つのはこのことを言つのであろうか。

《ヨイシヨ広場》（陸平をヨイシヨする会）

縄文の女神と雨月の宴

田島早苗

「陸平をヨイシヨする会」の山形研修旅行が九月十七日〜十八日に行われた。今回はこんにやくの懷石料理、縄文の女神、全国案山子コンクール、銀山温泉、斉藤茂吉記念館、蔵王のお釜見物と盛り沢山の目玉が並ぶ。

山形県舟形町西ノ前遺跡から平成四年に発掘された縄文の女神像は、二十年の歳月を経て今年九月六日、漸く国宝に指定されたと言う。これを

祝し「豊穰と祈り」―縄文の女神たちの宴と古墳時代人の想いと銘打った企画展が催され、会場の山形県立博物館内は、月曜日なのに、たいそう賑わっていた。

すつきりとした立像の女神、僅かにふくれあがつた臍のあたり、その下腹は大きく抉られている。後ろに回れば、強調された尻の見事な曲線美に圧倒されてしまう。縄文女神と聞いて、長野の尖石縄文考古館で見た縄文ビーナスのように胸、腹、臀部が大きくデフォルメされたイメージを描いていた私の思いは真つ向から否定されてしまった。

縄文人はこの女神像にどんな祈りを込めたのだろうか。次の日、上山市の「全国かかし祭」で二体の素晴らしい縄文女神の案山子に出会い、縄文女神が国宝に指定された事を喜ぶ県民の気持ちが、ストリートに胸に迫ってきたのだった。

昔銀山発掘で賑わっていた街を再生したという銀山温泉は、大正時代の木造建築がそのまま残る旅館が立ち並び、竹下夢二の描く美人が銀山川のほとりで夕涼みしている風景に出会えそうな、ロマン溢れる町だった。

宿の狭い木の階段を上りながら、大正時代にタイムスリップしたような不思議な感覚を味わっていた。夜の宴会では宿の温かいおもてなし料理に舌鼓を打ちながら、銀山採掘工人達の宴と同じように無礼講、カラオケ無しで盛り上がり、ヨイシヨの絆がまた少し深まったようだ。

二次会では、九月三十日に縄文池の畔で行われる「月見の宴」を盛り上げる思いの飛び出し、階上の部屋から苦情がくるほどのしやぎようだったとか。疲れて寝てしまった私は参加できず残念。

さて、中秋の名月の日、大型台風十七号が日本列島を縦断すると大騒ぎになった。前日の会議では、雨天でも池の畔の里山交流館で決行と決まっていたが、万一の事故を思い、まかない料理を作るのは急遽取りやめ、文化財センター内で時間を早めて行うことに決まった。串団子を一杯買い込み、後は持ち寄りの料理のみで、早速雨月の宴が始まった。

NPO「自然薯クラブ」の代表柳瀬氏は、障害のある若者と共に生活をしながら、自立を目指して農業に取り組み、クラブの若者達を引き連れて笛や太鼓、踊り、等で世界公演も果たしている快男児。本来なら篠笛の名手柳瀬氏の演奏を聴きながら、縄文池に映る満月を眺め、月見の宴から始まった十八年前のヨイシヨの会に思いを馳せる予定だったのに、天の意地悪が恨めしい。

黒板に描いた満月の縄文池を眺めながら、柳瀬氏の妙なる篠笛の音に乗って、銀山温泉で生まれた寸劇、月に帰るかぐや姫の物語が始まり、縄文時代からタイムスリップした村長も飛び出すパロディーに二十人ほどの観衆は大喜びだった。風雨が強まるはずの五時をとくに過ぎてても小雨がぱらつく程度の空模様は、ヨイシヨの熱気に台風も進路を変えたのかと氣勢が上がる。

子孫繁栄の祈りを土偶に込めたと言われる縄文時代。月に祈りを込めることも多かつたかも知れない。世界中が自己中心に陥り、ぎすぎすしている現代に、宇宙の一点に過ぎない我が身を見つめ直し、せめて、満月の宴を楽しむゆとりが欲しいと思わずにはいられない。

雨月の宴縄文人も仲間入り 早苗

《ことば座だより》

ふる里を大事に思うとは…

白井啓治

この情報誌を発行している「ふるさと風の会」

は、ふるさとの歴史文化の再発見と創造を考える、を活動のテーマとしており、朗読舞のことは座も、既成の物語を演じるのではなく、ふるさとに伝わる物語や文化、風景と言ったものをモチーフにした手話を軸とした朗読舞劇を創作し、ふるさとに生まれた新しい文化としてギター文化館を発信の出発点として活動を行っている。

先月号に、風の会の郷土史家・家打田昇三さんが「虚構と真実の谷間」と題した歴史の嘘についての長編物語を完成された事を紹介した。当紙にも現在連載されているが、掲載完結までにはまだだいぶ時間がかかる。

その物語の最後の締めくくり部分に、こんな一節があった。―何よりも「歴史は勝者の記録」である。敗者の歴史も有る、と言うことを忘れないようにしたい。―とあった。

打田さんの言うように記録された歴史と言うのは、敗者であっても勝者の立場や思考で書かれていると言つて過言ではない。古来、歴史書とは英雄録と言つてもいいだろう。だからそこには誇張と捏造が入ってくるのである。

しかし、勝者の立場での誇張や捏造であっても、その記録そのものは存在する事実であるから、記録の事象は真実ではないが事実だと言える。

しかし、誇張と捏造は必ずどこかで化けの皮が剥がされて、新しい事実としての顔が現われてくる。しかしそれであってもその新しい顔が、本当

の事実（真実）かと言えは、必ずしも事実（真実）と断言することはできない。

歴史の事実を追求したいと思うのであれば、打田さんのように、虚構と真実の谷間を見なければいけない。

九月の石岡のお祭りをNHK水戸局が取材しており、そこで石岡のお祭りは三〇〇年以上の歴史を持つと紹介していたが、いったい誰がそんなバカげたことを教えたのだろうか。仮にそのことを常陸国総社にクレームをつけたとすると、恐らく総社からは「常陸国総社宮の祭礼は三〇〇年以上の歴史があります。しかし、我々は石岡のお祭りが三〇〇年とは言つておりません」と回答なさるだろう。そして、同時期に石岡のお祭りをやるので協力しているのだと言うであろう。

客観的に石岡の祭りを言うならば、その形態は明らかに祇園祭の形態であるし、総社は日吉・八坂の系列ではない筈（いつの時代かで総社が八坂の系列を統合したのなら別だが）なので、現在の形態と言うか石岡祭りが三〇〇年の歴史と言うのはおかしいのである。

石岡祭りの原型を為す祇園祭も、明治までは祇園御霊会と言つていたのであるが、明治の廃仏毀釈によつて御霊会がとられ、祇園祭とだけになったのである。祇園祭に関しては、その始まりから現代にいたる時代考証がきつちりなされており、それを公に公開をしている。

残念ながら石岡のお祭りに関しては、石岡の市史を見てもはつきりとした考証がなく、打田さんの言葉をかりれば「勝者の弁」しかないし、それも曖昧にしか記載されていない。

このように言うと、石岡のお祭りの勝者の弁を

疑いもなく信じている人達からは嫌な目で見られるだろうが、石岡は歴史の里なのだから確りとした考証が必要だろうと思う。そうしないと、ふる里としての誇れる姿がますます萎み、ゴーストタウン化してしまうだろう。

ふる里を大切に思い、その文化的素晴らしさを暮らしの中に活かした将来を考えるならば、勝者ならんとする誇張や捏造を一度捨てて、確りとした考証の元に、新たな国づくりを考えることが必要なだろうと思う。

お祭りの盛り上がりと言えば、土佐のよさこい祭りがすぐに思い出されるのであるが、よさこい祭りの第一回は昭和二十九年の事で、その後三十四年にペギー葉山の歌う「南国土佐を後にして…」がヒットしたおかげで全国に大ブレイクしたお祭りである。そして今では「よさこいソウラン」の大流行と共に、何かのイベントの度に「よさこいソウラン」が踊られる。まさに日本のお祭りになつてしまつている。

昭和二十九年と言えば、石岡のお祭りに「関東の三大祭」なるキャッチフレーズを考えた頃ではないだろうか。

先人達が勝者の志向で考え、現代の元を築いてきたのだから、現代の者達は先人の創造を否定しても構わないのだから、新しい暮らしの知恵を創造していくことが必要であろう。

そんなことを思いながら、ことば座の十二月定期公演では、龍神山の龍の嘆きを舞物語にして演じてみたいと思つている。小林幸枝さんからは、何時台本が書き上がるかと急かされているが、なかなか進んでいない。

十二月公演は、柏木久美子さんと小林幸枝の舞

の競演を考えており、コンニャク座などでも演奏活動を行っているクラリネット奏者の橋爪恵一氏を招いて、詩の舞劇を創作していこうと思っっている。

モダンダンスの柏木さんは今回も伊藤道郎のナンバーを舞うことになっており、それに朗読舞をもう一つ。知人の詩人網谷厚子さんの山口小夜子の追悼詩「小夜子の夜」を舞う。山口小夜子さんと柏木さんは、伊藤道郎のテンジエスチャーを一緒に習ったのだとか。

ことば座の舞台も表現の範囲がだんだんに大きく広がってきており、楽しみな事である。十二月公演では、柏木さんと小林と一緒に舞う事を止めようと思っていたのであったが、柏木さんから折角一緒に居るのだから一つぐらい一緒に舞いたいとの申し入れがあり、以前に舞ったものに少し手を加えた舞詩を舞って貰う事にした。以下にその舞詩を紹介しておこう。

恵みの詩

言葉とは心の流れ
だから

風にも心の流れがあり
水にも心の流れがある
風の流れにも
水の流れにも

優しいうたがある
だから

命あるものは風に舞い
流れに舞うのです
人は素敵な言葉を聞いたとき

心やさしくなったり
新しい恋を感じたり
恐れたり
怒ったり

その素敵に誘われて心が模様する

人はさらさらと流れる言葉を聞いたとき
心もさらさらと流れだす

人はうるうるると心揺れる言葉を聞くと
心もうるうるると揺れて何かを予感する
だから言葉は音楽であり舞なのです

人の心の中に流れの音楽を忘れ舞を忘れると
憂いなく枯枝のようにカサカサと

そしてポキポキと折れてしまうのです
人は言葉を詠わなければいけない
人は言葉を紡がなければいけない

言葉が人に詠われ
紡がれたとき

人の心には舞が生まれ
恋が生まれ
生きる喜びが生まれるのです

さてこの詩をクラリネットの橋爪恵一氏がどんな曲をつけるのか、また、柏木さん、小林君がどんな舞いを創造するのか実に楽しみな事である。

この風の談話室への、陸平をヨイシヨする会の皆様から投稿いただけたようになって一年になります。

日の移ろいは何とも早く、ただただ戸惑っています。

います。日の移ろいに戸惑うなどは若かった頃にはなかったと思うのだが、残りの時を数えるようになってくるとこの移ろい速さが恐ろしく思えてくる。

自分がやりたいと思ったことは大体がやってきたつもりであるし、やり残したという悔いはない。しかし、この先、未だやりたい事は無限に広がっている。だがそれらをやらなかったからと言って悔いるというものではない。

若くても歳をとってもやれることは一つなのだから、やりたいことが無限大に広がっているからと言って幾つものやりたいことを行えるわけではない。

我が人生に悔いはない。嘯いて言っ訳ではない。今日やれることを今日やったのだから、今日が終わるのだ。そして、目覚めたら明日。(こさげ)

《ふる》

アレンジ・蕎麦・蕎麦会席料理のお店です。

(キター文化館連中)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが

皆さんをお迎えいたします。

電話0209-470-00000

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaeze.com/>

ギター文化館発「ことば座」第24回定期公演

「常世の国の恋物語」第31話

新龍神山伝説 「涸れた龍の涙」

2012年12月1日～2日 (14時開場、14時30分開演)

古墳時代は後期の頃。片岡村の奴賀比売が人に化身した蛇と契り、大比古を生んだ。大比古は常世の国の龍神にならんと村上山の底に二千年の眠りについた。大比古は二千年の前に一度目を覚まし、苦しみの涙で大飢饉を招いてしまった。その時は、吉生の里娘「風貴」が自らの命をもって大比古を鎮め、大比古と共に再び二千年を待つ眠りについた。しかし、大比古は再び二千年を待たず目を覚ましたが、大比古には既に苦しみの涙は涸れ尽きており、静かに横に眠る風貴を抱いて龍神の想いを捨てて宇宙の彼方へと去って行ってしまった。この国にはもう絶望と悲しみだけしか残されていないのだろうか。手話舞の小林幸枝が、涙の涸れた大比古の無念の心を舞う。

ことば座第24回定期公演は、クラリネット奏者の橋爪恵一氏を招き、小林幸枝の舞う常世の国の恋物語第31話「涸れた龍の涙」、柏木久美子の舞で山口小夜子の追悼の詩「小夜子の夜」そして小林幸枝と柏木久美子の共演で「恵みの詩」を舞います。

第23回定期公演より、柏木久美子が山本光のピアノ伴奏で伊藤道郎ナンバーを演じて貰っていますが今回は、シューマンのシンフォニック・エチュードより「祈り」スクリアピンのプレリュード「祈り」を舞います。

その他に、橋爪恵一氏のクラリネット独奏(曲目未定)をお楽しみいただきます。

小夜子の夜 (詩・網谷厚子)	白い水の底で 透き通る絹の衣を靡かせている 頭から被り ふわふわと足音もなく 飛ぶように軽やかに 絹の身体を滑らせて 両手をまっすぐに伸ばし 伸ばした先の手のひらを 蓮の花のように丸めて合わせる いとおしそくに 頭を揺らしながら見つめ また何回もくるくる回したか と思うと 開いていく 低い声で 太鼓のようにリズムを刻む読経
-------------------	---

朗読舞劇団 **ことば座**

〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

Tel 0299-24-2063 fax 0299-23-0150